

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：12603

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06783

研究課題名(和文)イスラエル/パレスチナにおけるアラブ性の探求 包括的な現代文化研究の基盤形成

研究課題名(英文)Searching for Arabness in Israel / Palestine: foundations of cultural studies

研究代表者

細田 和江 (Hosoda, Kazue)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・助教

研究者番号：80779570

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究「イスラエル/パレスチナにおけるアラブ性の探求 包括的な現代文化研究の基盤形成」の成果としては収集したヘブライ語文学作品を検討した結果、以下の点が判明した。

ヘブライ語文学に含まれるアラビア語の使用が移民一世の作品よりむしろ、その次世代の作家の作品に多く含まれており、そのアラビア語は通常文学言語として用いられる文語アラビア語ではなく、彼らが触れることのできたものは家庭内のみで用いられる口語のアラビア語であった。

加えてこうした傾向はイラン系の作家などアラブ系作家に止まらず二世、三世の作家がある程度持っている共通の特徴であることも判明した。

研究成果の概要(英文)：Through this research topic, it is clear that the writers from the second and third generations tend to use Arabic words and expression on their proeses. It is used more frequently than the writers from the first generation. And the more, the younger generations writers use spoken Arabic with Hebrew letters, not literary Arabic. This trend is applied to from Persian origins.

研究分野：イスラエル/パレスチナ文化研究

キーワード：イスラエル アラブ パレスチナ マイノリティ ヘブライ語

### 1. 研究開始当初の背景

1948年、歴史的に「パレスチナ」と呼ばれていた土地にユダヤ人国家が誕生した。イスラエルの独立宣言は、イスラエルを「ユダヤ国家」とであると述べる一方、民主国家として、宗教、出自に関係なく、全ての市民に同等の権利を与えることを謳った。

この新しい国家には、もともとの住民であるアラブ人がマイノリティの市民として存在している。かくして、人口の二割を占める彼らの存在は、「ユダヤ国家」を冠する国家において、脅威であると同時に決して無視できないものとなっている。

申請者の研究背景となったのは、上記した「イスラエルはユダヤ国家である」という言説とイスラエル国の現状とのあいだに感じる「ズレ」=違和感である。「パレスチナ」の地が歴史的にそうだったように、現実のイスラエルは多様な信仰や文化素地を持つ人びとが集う移民国家であり、パレスチナの「先住民」(アラブ人)をも内包して存在している。そしてその文化が、アラブ的なものを包含したハイブリット文化であるにもかかわらず、曖昧な定義しか持ちえない「ユダヤ人」の国家というテーゼに覆い隠されて存在している。

そこで申請者はこれまで、この言説をマイノリティ(アラブ人)の視点から検討することで、イスラエル国家の有り様の文化的再構成を試みた。イスラエル国家が形作ってきたアイデンティティを文化現象から検討する試みは、イスラエル内外の研究者によってもなされてきた。特に文学研究ではハナン・ヘヴェルが「現代ヘブライ文学」に対して「イスラエル文学」という概念を用い、マイノリティの文学をイスラエルの文学史上に位置づけたものの、あくまでも文学研究の範疇である。またその分析はジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリのマイナー文学論の手法を取り入れたものであり、包括的な文化研究までには至っていない。また文学と演劇に関して論じている Snir [1995]や、映画におけるマイノリティ表象を社会構造的に分析した Shohat[1989]などは目指す研究に近いと言えるが、前者は包括的な研究という点で、後者は映像文化や思想が中心という点で十分なものではない。

翻って日本では、現代イスラエル文化の研究そのものがほとんど行われていない。近年歴史学、人類学の分野ではこの断絶を乗り越えるべくした画期的な研究(鶴見[2012]、菅瀬[2009])が生まれているものの、現代文化研究自体はその担い手が少ない。それが文学・文化研究の枠組みを用いた横断的な本研究を進めるに至った理由である。

### 2. 研究の目的

本研究「イスラエル/パレスチナにおけるアラブ性の探求 包括的な現代文化研究の基盤形成」は現代中東地域研究において国

際的に重要な地域とみなされているイスラエル・パレスチナについて、文学を核とした文化活動の研究を通してこれまで看過されてきたアラブ性という共通の背景を明らかにしようとするものである。特にヘブライ語文学、アラビア語文学を中心に他の言語文化/非言語文化までの広範な事象を扱うことで、同地域の文化を包括的に把握するとともに、欧米、アジアの研究動向と突き合わせることで比較地域研究的な議論の土台形成を試みるものである。

### 3. 研究の方法

ヘブライ語・アラビア語文学を中心とした文化関連資料の収集・検討と、国際共同研究にむけての人的ネットワークの拡充が本研究の課題である。これまで日本国内で体系的に収集されることがなかった資料を収集しイスラエル/パレスチナの現代文学・文化資料のアーカイブ化を行った。さらに今度研究を進展させていく上で、イスラエル・欧米の文学/文化研究者や作家と、多言語環境の文化事象に関する共同研究を行った。すでに以下に記載した海外研究者とは交流がある/もしくは本年度中に研究交換を行う予定であり、彼/彼女らを起点にネットワークを構築した。さらには、近年イスラエル文学の翻訳が盛んな東アジア地域の文学関係者(研究者、翻訳者)と協力することで新たな共同研究の可能性を見出すことができた。

### 4. 研究成果

本研究では、日本国内でこれまであまり研究資料として蓄積がなかったヘブライ文学作品と映像作品を網羅的に収集することに努めた。予算や在庫の都合により本研究を遂行するのに必要な文献を優先したが、ヘブライ文学史上重要な作品などを中心に原著、英語翻訳を意識的に収集した。また日本語の翻訳文献はあまり数が多くないため、現在手に入れることが可能なものはおおよそ収集した。本資料は今後日本におけるヘブライ文学研究に生かせるよう検討してゆく。

こうした資料を用い、イスラエルのヘブライ語の文学資料に含まれるアラビア語の表現について Sara Shilo, Orly Castel-Bloom, Almog Behar, Ronit Matalon らの作品を検討した。その結果、アラビア語の使用がイスラエルのユダヤ人移民一世(Sami Michael, Eli Amirら)の作品よりむしろ、親や祖父母の世代にすでにイスラエルに移民し、自身はヘブライ語を母語としている若手の作家の作品にむしろ特徴的なアラビア語表現が多く含まれていることが判明した。また、そのアラビア語は通常文学言語として用いられる文語アラビア語ではなく、口語のアラビア語であることもわかった。これは彼らが触れることのできたアラビア語が家庭内のみで用いられる個人的なものであったからに他ならない。そのため若手作家のうち、モロッコ系

の作家の小説にはモロッコ方言のアラビア語が、エジプト系作家の作品にはエジプト方言やフランス語との混合表現が用いられていた。これは第一世代の作家が文語アラビア語を小説の言語として捉えていたのとは異なる。

またさらなる作品の詳細な分析（アラビア語の分量や複数の作品の比較検討など）の結果、第一世代の作家がアラブ文化やアラブ社会を背景・テーマの中心に据えて作品を執筆したのに対して、第二、第三世代の作家はアラビア語の口語こそが作品のアラブ性を表現するツールとして捉え、活用していることが判明した。本研究以前に研究を行っていたイスラエル領内のパレスチナ人作家のヘブライ語作品にもこうした口語アラビア語の使用がみとめられる。本研究の結果明らかになった口語アラビア語の使用をパレスチナ人のヘブライ語作品と比較することで、イスラエル社会におけるアラビア語の位置付けが判明できるのではという、今後の課題に繋がる仮説を設定するに至った

本研究の目的の一つである共同研究や国際的なネットワークの形成に関しては、ハーバード大学の世界文学研究所のセミナーや北米中東学会（MESA）への参加の際に欧米の研究者（David Damrosch, Lital Levy, Mariano Siskind, Gisèle Sapir, Ella Shohat）との交流を深めた。さらにイスラエルを中心とした次世代の文学研究者との研究交流も積極的に行った。また、Ronit Matalon, Almog Behar, Anton Shammas 氏ら作家と今後の翻訳出版について打ち合わせを開始した。日本の出版社との具体的な交渉には至っていないが、「アラブの春」から「イスラーム国」、シリア内戦などによってここ数年の中東地域への関心が高まるなか、すでにいくつかの出版社から非公式に文学翻訳の依頼を受けている。

また、アジア地域における共同研究に関しては、分担者として参加している別科研究費（15H03200）と台湾成功大学との共催で台湾での国際ワークショップを行い、本研究課題に関する報告を行った。「マイノリティ」や「バイリンガリズム」、母語と支配言語の関係など本研究の重要なキーワードについて台湾文学研究者（Tan Lekun）や「中国語文学」の研究者、大学院生と議論を深めた。その結果、イスラエルの多言語状況と中国語／台湾諸言語／日本語の影響のある台湾の多言語状況が、共通する部分もあると同時に、地域差も大きいことがわかった。

こうした交流の有効性を鑑み、本ワークショップは次年度以降も継続、拡大して行うことが決定した。また、今回のカウンターパートであった台湾成功大学台湾文学部とは具体的に共同研究を進めるべく、本年度の国際共同研究強化Bに申請予定である。

また、本業績を研究論文のみならず、一般向けの刊物（『フィールドプラス』、『Vesta』）や毎日新聞の「新世界文学ナビ」中東編など

で発表することで、イスラエル／パレスチナの二項対立とは異なった視点を一般の読者に提示できたことも大きな成果のひとつである。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

- (1) HOSODA, Kazue., "Japanese Reception of Literary Translation from the Middle East: Focus on Arabic and Hebrew Literature", 査読なし、『第9回 CISMOR ユダヤ学会議 The 9th CISMOR Annual Conference on Jewish Studies』, 2018, 131-151.
- (2) 細田和江, 「「ことば」で「たたかう」」, 査読なし、『フィールドプラス』18号、2017, 16-17.
- (3) 細田和江, 「ヘブライ文学からイスラエル文学への系譜」, 査読あり、『ユダヤ・イスラエル研究』30号、2016, 47-61.
- (4) 細田和江, 「信仰と習慣のあいだ：イスラエルのコンシェルは今」, 査読なし、『Vesta』105号、味の素食の文化センター、2016, 36-39.

〔学会発表〕（計 6 件）

- (1) 細田和江, 「イスラエルの「東洋」：イスラエルにおけるイラン文化」, 2017年度第4回大東イラン研究会（招待講演）2018, 大東文化会館.
- (2) HOSODA, Kazue., "Using Spoken Arabic in Hebrew Prose", International Workshop 「世界&区域文学的対話工作坊」(国際学会), 2018, 台湾成功大学.
- (3) 細田和江, 「食の宗教規定に関する比較研究：アメリカとイスラエルにおけるコンシェル（ユダヤ教の食物規定）「スシ」」, アサヒグループ学術振興財団助成金受給者報告会、2017, 朝日グループ本社ビル.
- (4) 細田和江, 「ヘブライ文学からイスラエル文学への系譜：イスラエルの「アラブ系」による作品の新たな潮流」, 基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」研究機関研究員発表会、2017, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- (5) HOSODA, Kazue., "Translation of the Middle Eastern Literature in Japan: Focusing on Israeli Literature", Annual Conference on Jewish Studies (CJS9)(招待講演) (国際学会), 2016, 同志社大学一神教学際研究センター.
- (6) 細田和江, 「イスラエル・ワインの現代史ーユダヤ人のパレスチナ入植から現状まで」, 東京工業大学「ぐるなび」食の未来創成寄附講座食の文化研究会公開講義第8回（招待講演）2016, 東京工業大学.

〔図書〕(計 1件)

細田和江 「イスラエル・ワインの現代史  
— ユダヤ人のパレスチナ入植から現代ま  
で」、阿良田麻里子編『文化を食べる、文化  
を飲む』、ドメス出版、2017、171-182.ISBN:  
978-4-8107-0832-5

6 . 研究組織 (1)研究代表者 細田 和江  
(HOSODA, Kazue) 東京外国語大学・アジ  
ア・アフリカ言語文化研究所・特任助教 研究  
者番号 : 80779570